

Geriatric nutritional risk index as the prognostic factor in older patients with fragility hip fractures

筒井, 智子

<https://hdl.handle.net/2324/7363651>

出版情報 : Kyushu University, 2024, 博士 (医学) , 課程博士
バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)



(別紙様式 2)

氏 名	筒井 智子
論 文 名	Geriatric nutritional risk index as the prognostic factor in older patients with fragility hip fractures (高齢脆弱性股関節骨折患者の予後因子としての高齢者栄養リスク指数)
論文調査委員	主 査 九州大学 教授 赤星 朋比古 副 査 九州大学 教授 小田 義直 副 査 九州大学 教授 石神 康生

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

脆弱性股関節骨折（FHF）は患者の生命予後を悪化させる疾患であり、深刻化する高齢化社会では重要な課題である。これまでの様々な研究から、FHF後の死亡率や二次骨折との関連因子が示されてきたが長期間の研究は少なく、また最近では栄養状態と予後に関する様々な報告があり、栄養不良は術後の機能回復や生存率に悪影響を及ぼすことが示されている。しかしながら、長期予後との関連を示した報告はない。そこで、著者らはreal worldでのFHF後の死亡率や二次骨折発生率とそれぞれの予測因子について、またGeriatric Nutritional Risk Index（GNRI）を栄養指標として栄養状態と生命予後の関連について検討した。対象は60歳以上の日本人FHF患者623例を対象とし、入院時の人口統計学的データおよび入院中の臨床情報を収集し研究は行われた。対象患者の退院後は半年ごとに最長7年間アンケート調査を行い患者の状態を把握した。GNRIは入院時の血清アルブミン値、体重、理想体重を用いて算出され、4つのリスク群に分類した：major risk（GNRI, <82）、moderate risk（82-91）、low risk（92-98）、no risk（>98）。死亡率はKaplan-Meier曲線を用いて、予後因子はCox比例ハザードモデルで評価した。平均観察期間は3.9年。入院時の平均年齢は82歳。FHF後の5年生存率は62.1%、二次骨折の5年発生率は21.5%であった。全生存率の予後因子は、高齢（HR 1.04）、男性（HR 1.96）、GNRI（HR 0.96）、併存疾患、BI（入院時：HR 1.00、退院時：HR 0.99）などが挙げられた。BMIは二次性FHFの予後因子であった（HR 0.88）。GNRI群別では、FHF後の5年生存率はそれぞれ35.4%（major risk）、55.9%（moderate risk）、76.4%（low risk）、75.0%（no risk）であった。majorとmoderateの患者は有意に全生存率が低かった（ $p<0.001$ ）。FHF後の死亡率の危険因子としては、高齢、男性、GNRIの低下、併存疾患の存在、BIの低下、二次骨折ではBMIの低下が明らかとなった。特に、GNRIスコアは、FHF後の長期予後を予測する新しい簡易な予後因子であることがわかった。

以上の成績はこの方面の研究の発展に重要な知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、検討結果などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったが適切な回答を得た。

よって調査委員合議の結果、試験は合格と決定し、博士（医学）の学位に値すると認める。

なお本論文は共著者多数であるが、予備調査の結果、申請者が主導的役割を果たしていることを確認した。